



級

第1回

随筆文

日 分
月 時 分

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

愛すべきハナクロの話をしよう。彼と初めて出会ったのは、六年前。私たち夫婦が、軽井沢の山のでっぺんに家を建て、引っこして初めてむかえた冬のある日のことだった。

冬の軽井沢は氷の世界と化す。私たちが住んでいる所の標高は千五百メートル。雪は少ないものの、日中の最高気温は氷点下七、八度。最低気温は氷点下十八度まで下がる。

ともかく、あの日も寒い日だった。雪まじりの風がごうごうと音をたててふき始めた、すさまじく寒い夕暮れ時。二階の窓から何気なく外を見ておどろいた。ふり続く雪を受けながら、じつとうずくまって動かない一匹の白黒のブチ猫がいるのを見た。

わが家は夫婦そろって猫に目がない。私はすぐさま、飼い猫用のキャットフードを手にもって走り出た。とはいえ、相手はノラである。警戒してなかなか近づいてこない。

仕方なく玄関のドアを細めに開け、玄関内のゆかに餌の入ったボウルを置いて様子を見ることにした。(なにしろ外はすでに氷点下十度。外に出しておく餌はすぐこおってしまうのである。)

よほど空腹だったのだろう、その白黒ブチはまもなく姿を見せた。ふがふが言いながらボウルに頭をつっこみ、餌を丸のみにしている様子は、下品の極致といったあんばいである。

ノラにしては巨大なオス猫であった。鼻とその周辺は真っ黒で、顔中に黒のブチが飛び散り、はっきり言って、顔は悪い。だが、意志が強そうなその表情に、ノラのみすほらしさは微塵もなかった。

その日からそいつは毎日、わが家に餌をもらいに来るようになった。私たちはハナクロと名付け、通信販売で犬小屋を買って、中に敷物を敷き、玄関先に置いてやった。歯の感じや毛並から見て、相当の高齢であることがうかがわれた。どうやって餌の少ない氷の冬を生きのびてきたのか、想像しただけでいとおしさがつのった。

(学習院中・改)

(1) 筆者が住んでいる軽井沢の冬の様子を何とよんでいますか。

()

(2) (1)のようによぶのは、どうしてですか。

()

(3) 「ハナクロ」の外見から筆者は、ハナクロの性格をどのようにとらえていますか。

()

(4) —線「いとおしさがつのった」のは、どうしてですか。

()



級

第1回

説明文

日 分 分
月 時 時

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

暑い夏の日の夕方、^①入道雲が空高くそびえ始めると、人々は今に夕立がくるぞと言って喜ぶ。多くの人は、入道雲の発生が、しばしば夕立につながることを経験で知っているからである。

ところでこのように、入道雲を見たとき、その色や形が美しいとか、高さほどのくらいだろうかなどと、雲それ自体に注意を向けるのではなく、いま目にしている雲を手がかりとして、やがて来る夕立のことを思うとき、私たちは雲が夕立の記号として働いていると言う。

また「火のないところに煙は立たない」ということわざを知っている人は多いと思うが、このように煙しか見ていないのに、きつとその下では何か燃えているはずだと考える場合も、煙をただ煙そのものとしてではなく、火という別のものを表す記号として見ていることになる。

この^②二つの例で示したように、あるものAが、それ自体としてではなく、何か別の特定のものBとの関連で常に（または多くの場合に）受け止められるとき、AはBの記号であると称する。つまり入道雲は夕立を、煙は火を表す記号というわけである。

さてここにあげた例にある雲、夕立、煙、火のどれもみな天然自然の現象であって、人間の意志や営みとは直接関係がない。そしてこれらの諸事象つまり雲と夕立、煙と火の記号的なつながりをささえているものは、どちらの場合も自然の因果関係である。人々は長い間の経験から、自然界における特定の原因と結果の結びつきを知っていて、ある時は原因となる事象（入道雲）を見ただけで結果（夕立）を予測し、ある時は結果（煙）だけを見て、その原因（火）を察知するのである。

自然記号はしかし何も因果関係によるものだけではない。例えば海面近くカモメの群が乱舞するのを見ると、漁師たちがいつせいに舟をそちらに向けることはよく知られている。漁民たちはカモメの群の下には、魚の大群が浮上していることを経験で知っているのだ。このカモメの群舞と魚群の存在との関係などは、きわめて高い共起の蓋然性に裏付けされているとも言うべきだろう。

このように考えてゆくと、私たちは日常生活の中で、自然現象間の何らかの相互関係に基づく記号的解釈を、数限りなく行っていることが分かる。もしかしたら、あるものや事柄を、それ自体として問題にするより、それに触発されて何か別のものを考えたり、行動したりすることの方が多いのかも知れない。^③この意味で私たちは無数の自然記号に取り囲まれて生きていくと言いうことができよう。

ところが私たちの利用する記号の中には、いま説明した自然記号とは異なる性質をもつ、もう一つ^④別のタイプの重要な記号があるのだ。それは記号と、それが表し示す事柄との相互関係が、自然記号のような因果関係や、高い共起の蓋然性などにささえられているものではなく、人為的社会的な、一種の取り決めに基づく記号である。

具体例として交通信号のことを考えてみよう。現在では世界中どこに行っても、人や車が進んでよいときは青（緑）、停止の合図は赤と決まっている。しかしこの赤色と停止、青色と進行の結びつきは、あらかじめ言うまでもなく、自然の因果関係でもなければ、人間にとって本能的生理的なものとも言えない。

何かと理由はあるにしても、結局は人間が社会的な約束事として、人為的に決めたものである。だからこのような約束による取り決めを、もし何かの理由で知らなかった人にとっては、赤や青は記号としての意味を持たず、単なる色彩（光）でしかない。この点が煙と火のつながりや、カモメの乱舞を魚群の存在と結びつける自然記号とはまったく異なるのである。

現代社会においては、いま述べた信号や各種の交通標識をはじめとして、きわめて多くの色彩、光、図形、音などが、特定の場面や状況のもとで、社会的に決められた記号として用いられている。

このような人為記号は、それが社会的な取り決めであるだけに、国により

地方により、意味するものが必ずしも同じとは限らないことは、容易に想像できるだろう。

第二次大戦後に日本を占領したアメリカ軍は、危険(物)を標示するとき、黄色と黒の縞模様を使ったが、これなど初めのうちは、日本人にその意味が分かりにくい記号であった。また日本でも死者に対する哀悼の意を表す色が、所により白であったり黒であったりする違いが見られる。このように特定の国、限られた集団の中だけで通用する社会的な人為記号は、そのことを知らない部外者にとっては、しばしばとまどいや思わぬ失敗の原因となるものだ。

(瀬中・改)

注 蓋然性：確からしさ

(1) — 線①「入道雲」について、多くの人々はどのようなようにとらえていますか。説明しなさい。

(2) — 線②「二つの例」であげてある、入道雲と夕立、煙と火の関係を、筆者は何とっていますか。

(3) — 線③「この意味」とは、どんな意味ですか。「ー」という意味」に続くように答えなさい。

という意味

(4) — 線④「別のタイプの重要な記号」について、次の問いに答えなさい。

1 これはどんな記号か、文中の言葉を使って二十字以内で説明しなさい。

記号

2 その例として、どんな記号があげられていますか。

(5) 人為的に決められた記号は、自然記号とどのような点で異なりますか。説明しなさい。

(6) 第二次世界大戦後、日本を占領したアメリカ軍の使った、黄色と黒の縞模様の話から、筆者の言いたかったことは何ですか。



級

第1回

物語文

日 分
月 時 分
時

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「①秋の氏神さんのお祭りまでに、このひざ掛け編んどくから、持ってけや。冷え性じゃけんなあ、おまえは。」

夏の終わりに来た時にも、②選暦せんれき同近のわたしの母にそんなことを言いながら、せつせと毛糸の編み針を動かしていた。

③その祖母が、一週間前に床についた。季節の変わりめで、風邪をこじらせたのが原因だった。

いったん寝こむと、それまで張りつめていた糸がブツンと切れたように一気に容態が悪化した。

「心臓がだいぶ弱ぶじやくってるらしい。こゝろ二、三日が峠とがと、お医者はみてる。」
玄関先でわたしたちを迎えた叔父おじが言った。

裏山うらやまの見える奥座敷おくざしきに、祖母は寝ていた。
眠っているのだろう。目を閉じている。むくみのために、しなびた顔がいつもよりひとまわりふくらんだ気がする。息をするたびにヒューヒューと肩が大きく上下した。

「おばあちゃん。」

(A) 母が耳もとで声をかけた。
返事はない。

「おばあちゃん、みんな来たよ。」
もう一度声をかけられ、ようやくうつすらと目を開けた。

(B) 「何か食べたいもんでも、ある？」

それから思い出したように、小さな声でつけ加えた。

「あれ、取ってくれや。」
「あれって、何ね、おばあちゃん。」

二番目の叔母おばが聞き返す。
祖母はゆっくり、部屋の片隅かすみに置かれたタンスの方に目を向けた。

「ほら、あの箱や。タンスの上の。」

(C) 見ると和ダンスの上に、四、五十センチ四方の段ボール箱が一つ載っている。

「何やね、この箱……。」
「着物、ぬうた。着てくもん、ないと、困るけになあ。」

「着てくって、どこに。」
「あつちに。」

(D) どうやら祖母は、よくなつてまた温泉めぐりでもする時のことを考えているらしい。年をとつてからは、娘たちや家族と、時おり近場の温泉を訪れた。その時のために、じぶんで着物を仕立てるのも、祖母の楽しみの一つだった。

「そうだね、おばあちゃん。良くなつたらまた一諸いちしよに、温泉行こうね。」
いながら叔母が、箱のフタを開けた。

中を見て、④わたしたちは一瞬、息をのんだ。

着物、ではあつた。が、すべて真っ白なものばかりだ。白い襦袢じゆばんに白いお

腰こし、白い経帷子きんかたびら。頭につけるあの三角の形をしたのまである。それらが、きちんとたたまれ、箱に収められていた。どれも一針一針丹念にぬつたもので、できあいのものではない。

「急いそに入り用になつても、みんなが困らんよう、作つといたんや。けど、足袋たびだけはぬえんから、昔のままや。」

そう言つて、目を閉じた。

母が箱の底から足袋を取り出した。指先がわずかに黄ばみ、しわになつていた。

⑦みんな、しばらくぐだまりこくったままだった。

(女子聖学院中・改)

注 経帷子…死んだ人に着せる白い着物

(1) この文章からは、次の一文がぬけています。どこに入るのが適当ですか。文中の(A)・(D)から選び、記号で答えなさい。

「ない……。」

(2) この文章のあらすじを、「見まい」「峠」「死期」という言葉を使って、九十字以内で答えなさい。

(3) —線①「秋の氏神さんのお祭りまでに、……冷え性じゃけんなあ、おまえは。」と—線④「着物、ぬうた。着てくもん、ないと、困るけになあ。」はともに祖母の会話ですが、この二つの会話の表現から祖母のどんな様子がかがえますか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を、それぞれ漢字二文字で答えなさい。

□(A)があるときの祖母と□(A)がないときの祖母の様子が□(B)的に描かれている。

(A) () (B) ()

(4) —線②「還暦間近のわたしの母」とありますが、「わたしの母」は何歳に近いと思われますか。漢数字で答えなさい。

() 歳

(5) —線③「その祖母が、一週間前に床についた」とありますが、そのときの祖母の様子を三十字以内で答えなさい。

()

(6) —線⑤「あっちに」とありますが、それはどこのことですか。三十字以内で答えなさい。

()

(7) —線⑥「わたしたちは一瞬、息をのんだ」のは、どうしてですか。その理由を三十字以内で答えなさい。

()

(8) —線⑦「みんな、しばらくぐだまりこくったままだった」のは、どうしてですか。その理由を「覚悟」という言葉を使って、二十字以内で答えなさい。

()